様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３３９１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０３４５

研究課題名（和文）国際協働授業の展開と英語コミュニケーションの研究

研究課題名（英文）International Collaborative Presentation based on Online Interaction

研究代表者
影戸　誠（KAGETO, Makoto）

日本福祉大学・国際福祉開発学部・教授

研究者番号：５０３５１０８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：この研究の目的は、交流実績のある海外大学とICTと対面のハイブリッドによる「実践共同体」を構築することである。テレビ会議システムを活用し、構成主義的な観点から共同授業「英語プレゼンテーション」を実施する。学習成果は夏に開催される対面の国際協働学習場面「ワールドユースミーティング」（以下WYM）で行う協働プレゼンテーションで発揮させる。一人一端末での授業外での学習も誘発させ、インターネットの教育利用により、「つながりながら、国際的なテーマにともに挑み」つつ学生たちが対話的な学びでの中で、解答を作り上げ発表した。webで公開されている80の学習成果はアジアにおけるロールモデルとなる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify  the effect of Online collaborative presentation through the classroom interaction based on the sister school relations internationally.  the "practical community" by a hybrid of face to face and ICT with overseas universities worked efficiently. Students ‘ learning outcomes on the web shows not only how to make an effective presentation but also how to deepen the theme internationally based on the constructivism theories.
The Face to Face occasion was the sophisticated stage for the students. "World Youth Meeting" (WYM) was not merely the presentation event, but the placed they challenged the collaborative presentation in front of big audience. While keeping the connection with the Internet tool, we were able to accumulate research through "class collaboration". As a result, "Collaborative presentation" learning outcome could be presented in total of about 60 video clips.

研究分野：教育工学

キーワード：国際連携　協働学習　英語プレゼンテーション　連携授業　フィリピン　カンボジア　ワールドユースミーティング

## １．研究開始当初の背景

海外との連携に「体験学習理論」（Kolb, 2001）を活用する。自らの感覚で世界をとらえ、英語の働きを体感することはグローバル人材育成には不可欠である。国際的な体験学習は一過性にとどまり易いが、構成主義的な視点「学習者自らが意味を構成する」（Jonassen,1999）を取り入れることで、交流を深く自らのかかわりの中で認知醸成させることができる。グローバル人材の育成には知識構築だけでなく、心を動かす体験や、自分の将来のデザインできる力が必要である。世界の事象はめまぐるしく展開し、自分たちとの関りとして認識されるべきである。グローバル人材育成のためのモデルとして、SEE（知る）、FEEL（体験・感動）、INTERNALIZE（生活化）モデルがある。・（kageto,Sato, 2012）これらは学生のための国際連携学習を実践してきた中から生まれたものである。また 2000 年以降の情報コミュニケーション手法（Web、SNS など）を教育的に活用することで国際的な「実践共同体」の構築が可能となる。Wenger（1999）が重要性を指摘する経験の異なる参加者が「共同体への参加を通して、技能と知識を身に付ける」ということは、我々が主催し 15 年間継続して取り組む WYM の中でも実践されている。このような活動は、主に EU の新しい学力観、Online Collaborative Competency にも対応するものである（小柳,2013）。

## ２．研究の目的

交流実績のある海外大学と ICT と対面のハイブリッドによる「実践共同体」を構築し、共同科目「英語プレゼンテーション」を実施する。テレビ会議システムを活用し、構成主義的な観点から「質問すること」を基軸とした活動を展開する。モデルにそったオンラインプレゼンテーションを行わせ、それに対する３つの質問を設定し回答していく。交流のプロセスをファイル・画像としてサーバに蓄積し、ALT が再録音することで、コミュニケーション力を高める英語教材を開発する。これらの学習成果は夏に開催される対面の国際協働学習場面「ワールドユースミーティング」（以下 WYM）で行う協働プレゼンテーションで発揮させる。一人一端末での授業外での学習も誘発させる。

## ３．研究の方法

本研究は三つの柱を設定し展開する。①質問を生かした構成主義的な国際連携授業のシラバスの開発と実践（二ヵ国）②学生動画から作るネイティブによるモデルの作成。ICT サポートにより、国をまたいだ英語教材活用の実現（現状の７カ国フェースブックコミュニティを活用 2010 Sato,Kageto）。③第 16 回-18 回 WYM で日本で協働作業を実施、これまでの交流成果を確認（正規授業として展開中）。これまでの国際連携の実績を活用し集大成する(影戸、2011)。連携授業は 2010 年より部分的に取り組んできており、ICT 活用、授業展開については実験済みである。これまでの教育研究の成果の上に立った研究計画である。つながることと学ぶことがネットワークと対面で実感でき、自己肯定感を高めるシステムである。国際的にプレゼンテーション教材を共有すること自体がインフォーマルな自然な学習を促進させる。

## ４．研究成果

### （1）大学間連携

この研究の目的は、交流実績のある海外大学と ICT と対面のハイブリッドによる「実践共同体」を構築することである。

代表的交流校である王立カンボジア大学プノンペン校やフィリピンのミンダナオ国際大学など、担当教員との連携も確かなものであり、これまで培ってきた人的ネットワークの上に立って展開できた。これらの大学と、授業の時間帯を合わせ、スカイプあるいは、Google の機能を使って連携してきた。右図はミンダナオ国際大学とのグループ別の英語プレゼンテーション作成場面である。このような時間を通して、論議を進めるとともに、それらを、最終的にネイティブスピーカーによる音声録画で、教材として機能も持たせた。

**図.1　Skype での協議**

単なる英語コミュニケーションだけでなく、アジアのおける活用方法に焦点を当て、単語レベル、スピード、プロソディについて留意した。とりわけ教材化にあたっては、日本だけでなく連携校、ワールドユースミーティング参加国のとっても役立つ英語教材とした。

カンボジア、マレーシア、フィリピンの各校には、海外フィールドワークの授業で、現地を訪問し、これまで作り上げたソーシャルプレゼンスをさらに深めている。

授業での交流、Skype を通しての質疑、WYM での日本での 10 日間の協働作業、年度末の海外各地での交流と連携を深めている。

（事例）王立カンボジア大学プノンペン校（RUPP）では、ラビー副学長表敬訪問の後、日本語授業の見学、授業内での交流、さらには敷地内にあるカンボジア・日本人材センターを訪問し、同組織に開催するプログラム「絆フェスティバル」に参加し、現地学生とアクティブラーニングによる日本・カンボジア交流などを行った。そのほか、RUPP と連携の深い、プノンペン・教員研修センターなど訪問し将来の先生たちと英語教育の方法や、英語でのプレゼンテーション大会を開

**図.2　カンボジアフィールドワーク**

催し、ICT を活用して伝えること、協議すること、新しい知見を生み出すことなど、主体的な英語コミュニケーションでワークショップを行った。
日本―カンボジア・フィリピン・マレーシアの連携はこのような、オンラインーイベントー現地訪問の年間を通した学習で成立している。

(2) アジアにおける英語プレゼンテーションの在り方

3 年間の研究を通して次のような、ポイントを押さえたプレゼンテーションが英語指導において必要なことが明らかとなった。
・構成　聴衆の分析を行う。また 1 つのコアメッセージに対し、3 つ程度のトピックで対話的なやり取りを入れること
・ファイル作成においては、言語の壁を超えるビジュアルなシート活用に心がけること、また具体的な事例を取り入れること
・リハーサルには十分に時間をとり、英語での発信力がプレゼンテーションの重要な要素であることを確認すること
・「話す力」は言語だけでなく、インタラクティブなやり取りやジェスチャー、さらには、グループで取り組む場合は、話してないプレゼンターの態度も大きなメッセージとなること

WYM での展開される協働プレゼンテーションは、質問のキャッチボールによって深められる。大会 2 日間では 30 近いプレゼンテーションが展開され、これらがビデオ収録によって後日、英語英語教材として参加者、参加各校に公開され、利用されている。
実際の音声、ジェスチャー、プロソディ、質問のやり取りによる構成の深まりを全体的に把握できる。

**図.3　Video Clip**

図は、日本福祉大学と韓国のチョンナム大学とのプレゼンテーションのクリップであるが、これらを web 上から見ることができる。

（3）テレビ会議システム活用

構成主義的な観点から共同授業「英語プレゼンテーション」を実施した。インターネットの教育利用により、「つながりながら、国際的なテーマにともに挑み」ことを実現した。

**図.4　韓国に質問**

図は教室と教室を結び、テーマについて討論を行っているところである。隣国韓国とは、「歴史教科書の在り方」(チョンナム大学との共通テーマ)について語り、フィリピンとは、日本軍の統治時代の戦争犯罪について論議した。日本は島国であり、国際連携を切れやすいとされてきたが、インターネットの安定的な接続と定期的な授業内での接続によって、グローバルなテーマについて論議を深めることができ、プレゼンテーションの内容も一過性で終わることなく、「質問」のやり取りの中で、参加者それぞれが意味が構成できる形にまで高めることができた。

プレゼンテーション内容を深めるために、「質問」は第二次世界大戦時日本軍が残した 3 つのこと、餓え、性的侵略、おじきなど、現地教科書の取り扱いや、それについて現在の若者たちはどう歴史事実をとらえているのかであった。

**図.5　　フィリピンに質問**

これに対して､｢将来のより良い関係構築のため、過去よりも未来を考え、日本の素晴らしい側面を積極的に見ようとしてる」との回答を得た。これらのやり取りを反映したプレゼンテーションに取り組んだ。

また、これらの動きは、近年のアクティブラーニングの視点から、新聞にも取り組まれ、見学者も増加した。

（4）Web 教材

国際連携授業の中で、学習成果として、アジアにおける発信型教材の作成を行った。手の届く説得性のある教材であり､単語レベル、スピード、プロソディに留意したコンテンツ

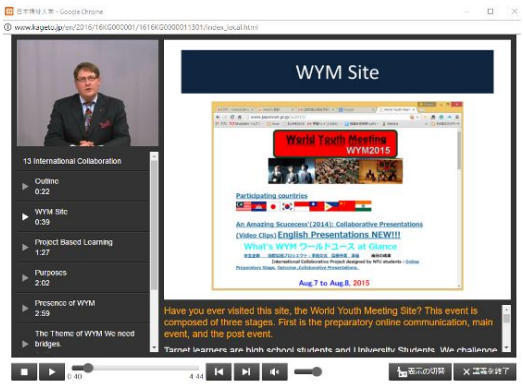


**図.6　　英語教材化**

である。このコンテンツは海外提携校だけでなく、WYM に参加してきたこれまで 10,000 人の生涯学習教材として提供されている。

学生たちのコラボレーションの中から生まれてきたものである。

表示切り替え機能を持っており、ネイティブイのビデオを拡大し、口元を見ながらシャドーイングすることもできる。

全体の長さもアジアに学生に適した長さ、3-5 分の長さにしてある。

テーマとして交流には欠かせない日本の文化、歴史、さらには WYM のコンセプトなどを作成した。また WYM で実施されたコンテンツについても、ネイティブによる再録を行い、コンテンツとしての完成度を高めた。

(5)　国際連携イベント、ワールドユースミーティング

WYM は、本研究開始年、2014 年夏より連続で、3 年間開催された。どの年もテーマを変えながら、1,000 人を超える参加であった。国内大学、高校合わせて 25 校、海外 25 校の参加であった。直近の 2016 年度は以下のようなイベントとなった。目的として連携校と次を掲げた。ICT、英語コミュニケーションを 1 年間にわたりデザインされた協働プロジェクトの中で取り組むこと。　・異文化を持った参加者が、当然起こりうる「文化衝突」を克服しながら、英語プレゼンテーションを作り上げ発表を行う。完成までのマネジメント力を身につける。　・英語での実務を体験し、海外、他地域学校と連携を取りながら実際のイベントを作り上げること。　・インターネットを活用して、複数拠点間を結ぶマルチラテラルな国際交流を体験すること。　・国際連携の在り方を学び英語で「協働して考える」力を養うこと。　・自ら課題を設定し仲間と行動の中で解決していくこと。　・テーマを深めるため､｢一人で考える力｣を持ち、他者との協議に生かす方法を知り、実践する。・適切な国際感覚をもち、国際交流を通じ自らのアイデンティティーを確立すること。・共同作業の要素（分業、集約、発展）を理解し、Scratch, reflect, Enjoyment の視点から取り組みを振り返り、自分育ての要素を獲得すること。

（2016 年度の例）

日時：　2016 年 8 月 7 日、8 日

参加人数：　のべ 1014 名

テーマ：　“ Building Our Shared Future”
-Our Commitment to the Next 10 Years

本行事は、2016 年度で 18 回目に当たり、ICT の教育利用の世界的な広がり背景に、国際的な協働学習を実現させ、異なる文化、コミュニケーション方法をもった海外学生、生徒との英語プレゼンテーションに挑戦させ、インタラクティブな学習環境を提供するものである。｢アクティブラーニング教室｣の活用をプログラムに組み込み、一方的に伝える英語プレゼンテーションから、論議により深める 30 人規模のセッションをデザインした。全体会（各教室 300 名）でのプレゼンテーションの後、論議中心のアクティブラーニング

教室での学習は満足度の高いものだった。
　大会アウトカムとしての英語プレゼンテーションもビデオクリップとして、参加者のみならず英語での発信力をテーマとする教育関係者に Web を通して発信されている。
　ICT 環境がカンボジア、フィリピン、マレーシアなどで改善され、5 月より取り組んだ事前準備にはインターネットテレビ会議システムが有効であった。これらの活動を通して、プレゼンテーションの構成、国際的なデーター収集、将来に向けての提言の検討などが可能となった。その結果、東アジアにおける高校生、大学生の英語プレゼンテーションとしては完成度の高いものになりつつある。特に、異文化を持った参加者が話し合いにより最後に作り上げる作品は単なる交流では成しえない、「conflict」を乗り越えた新しい国際協働事業のモデルとなりうるものと考えられる。
. 学部教育と WYM
　学生たちは 10 のグループにわかれ学生実行委員会委員としてこのイベントを支えた。週一回の「国際ファシリテーション」の授業の中で、グループのタスクにむけ、課題を発見し、KJ 法などの手法に則り論議を深めた。Skype 活用も安定した交流ツールとなり、生きた英語でのやり取りも回数多くてんかいｓれた。経験学習の理論　Kolb(1984)や体験学習理論　松尾　睦（2011）を実践的に身につけていった。正統的周辺参加論（Legitimate Peripheral Participation）の理論は高等教育におけるグループ活動、研究活動において根幹をなすものであり、自分育ての戦略、戦術を身につける“学習場面”となった。
　仕事を分担し、「学習者自らが意味を構成できる」学習環境（Constructivism）に留意して活動を行うとともに、問題解決を次のような観点から取り組んだ。（Reigeluth　2011）。
　・推進のプロセス（目標設定、実践、評価分析、新規目標設定）を理解し実践する。
　・教員・仲間からの指導と助言により、問題解決を図る。
　・振り返りを大切にし、活動をモニターする。
　・振り返りの中で、articulation に留意して、達成できたことを明確にする。
　・活動を振り返りモデル化することによって active knowledge を明確にする。
「協力」「協働」など学生たちは言葉では知ってはいるものの、実感ももっているわけではないので、将来にわたって活用できるほどアクティブな知見としていなかったが、Authentic な環境で、実感できるまでに体験を深めた。　それらを評価するパフォーマンス評価として、1 枚のマッピング図や、係り別のプレゼンテーションによって評価をおこなった。

＜引用文献＞
Reigeluth, Instructional-Design Theories and Models,: The Learner-Centered Paradigm of Education2016/8/1

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　（計 2 件）

①Makoto Kageto, Yuichi Kageto
International Collaborative Learning, Focusing on Asian English　査読有
International Journal for Educational Media in Education 2016, Vol1 PP3-10

〔学会発表〕（計 11 件）

① Makoto Kageto, Shinichi Sato, Yuichi Kageto
Effective Presentation Tips Embedded in Authentic Setting.
教育工学会　2016, 9, 17-19　（大阪大学　大阪府吹田市）

② Makoto Kageto, Yuichi Kageto
What Factors should be Considered in Designing the Successful International Collaboration.
International Conference for Media in Education　, 2016,8,18-20 京都外国語大学（京都府京都市）

③ Makoto Kageto,
How to Cultivate Global Competencies Through Project-Based collaborative Learning in University Students.
EDMEDIA
(Educational Media and　Technology)
2014,6,23-6,26　タンペラ大学（タンペラ市（フィンランド））

〔その他〕
ホームページ
WYM サイト
http://www.japannet.gr.jp/w2014/
http://www.japannet.gr.jp/w2015/
http://www.japannet.gr.jp/w2016/
英語コンテンツ
http://www.kageto.jp/en/2016/

## ６．研究組織

(1)研究代表者
影戸　誠　（KAGETO, Makoto）
日本福祉大学・国際福祉開発学部・教授
研究者番号：50351086

(2)研究分担者
佐藤　慎一　（SATO, Shinichi）
日本福祉大学・全学教育センター・教授
研究者番号：10410763